

初代教会に学ぶ

「初代教会の原点に返れ」という初代教会をロマンチックに理想化するつもりはない。初代教会といえども完全ではなかった。罪もあり過ちもあった。しかし、使徒言行録を見ると、これから歴史の中を歩み出していかなければならない初代教会の姿が描かれており、そこには、教会はどうあらねばならないか、といふ基本または原則が教えられているように思える。

使徒言行録2:41? 47はその好例であろう。そして一同はひたすら、使徒たちの教えを守り、信徒の交わりをなし、共にパンをさき、祈りをしていた(42節・口語訳)。ここには教会の原点ともいべきいくつかの特徴が教えられている。

まず第1に、初代教会は神の御言葉に聞き、神の御言葉に従う教会であった。初代のキリスト者たちは、使徒たちの教えにひたすら耳を傾け、ひたすらに従った。そこに彼らの力の源泉があった。

宗教改革者カルヴァンはその名著「キリスト教綱要」の中で、真の教会の第1にして最も顕著なものは神の言葉への忠誠であると教えているが、そのとおりである。教会は神の言葉の上に、神の言葉によって立っている。神の言葉が正しく説かれ、神の言葉が正しく聞かれ、そして神の言葉が正しく従われるところに神の教会が存在する。

第2に、初代教会は喜びも悩みも共に分かち合う交わりの教会、兄弟愛の教会であった。「一同はひたすら…信徒の交わりをなし…」とある。ここで「交わり」と訳されている語は「共有」を意味する「コイノーニア」であるが、これは教会を表す優れた新約聖書の用語の一つである。

教会とは、キリストによってあがなわれた聖徒たちのコイノーニア(愛の共同体)である。キリストの福音の祝福を共に分かち合っていくとともに、キリスト者としての喜びも悲しみも、祝福も苦悩も、キリストにあって共に分かち合い、共に担い合っていく。そこに真の教会のしるしがあり、また力がある。

第3に、初代教会は祈る教会であり礼拝の教会であった。「一同はひたすら…パンをさき、祈りをしていた」。「パンをさく」とは聖餐式を表し「祈りをしていた」とは礼拝集会における祈りを意味する。そして彼らは「日々心を一にして、絶えず宮もつでをなし…よろこびとまごころをもつて…神を賛美した」のであった(46? 47節)。

教会の生命は祈りと賛美、すなわち礼拝にある。キリスト者個人にとってもそうである。祈りに欠け、賛美に乏しく、礼拝への敬虔な精神を失った教会(或いはキリスト者)は神の祝福を得ることはできない。教会の(そしてキリスト者人生の)真の目的は「神の栄光をあらわし、とこしえに神を喜ぶこと」にある(ウェストミンスター小教理問答書第1問)。そしてそれは日曜日毎の主の日の礼拝においてまず第1にもっとも鮮やかに実現するのである。キリストの恵みに生かされている者は礼拝の喜びに生きる者である。

ペンテコステの日にスタートした新約の教会は、み言葉への聴従と、祈りと賛美において神に仕える礼拝の教会であり、またキリストの恵みを互いに分かち合う交わりの教会、愛とゆるしのコイノーニアであった。